

鹿児島の植物 74

外来種の植物

植物担当 久保 紘史郎

本来、県内では生育していなかった植物が繁殖して、生態系や人間の生活に影響を与えています。身近で目にする機会も多い外来種の植物とその影響について紹介します。

オオキンケイギク



道路沿いに群生するオオキンケイギク

5月から6月頃、道路沿いなどにコスモスに似た黄色の花が咲いているのを見たことがある人も多いのではないのでしょうか。それが、オオキンケイギク（キク科）です。北アメリカ原産の多年草で、元々ドライフラワーに利用する目的で、日本に入ってきました。道路沿いに群生する姿は、一見するときれいにも見えます。しかし、生命力が強く、急速に繁茂するため、元々そこにあった在来植物が生育できなくなってしまいます。また、在来植物を利用していた、昆虫なども生きていけなくなってしまい、生態系に大きな影響を与えるおそれのある植物です。

そのため、現在では外来生物法により、特定外来生物に指定され、栽培や生きた状態で運搬することが禁じられています。きれいだからと言って、野外で採集してきたものを、花壇などに植えると、罰せられてしまいます。

ホテイアオイとポタンウキクサ



ホテイアオイ(左)、ポタンウキクサ(右)

写真：環境省

ホテイアオイ（ミズアオイ科）とポタンウキクサ（サトイモ科）は、流れの緩やかな湖や沼に浮かびながら生育する水草です。金魚鉢や水槽などに浮かべ、観賞用として、利用されてきました。

どちらも、かわいらしい水草ですが、条件が揃うと1カ月で10倍ほどに増えることもあり、2カ月で100倍、3カ月で1000倍と爆発的に増殖し、膨大な量になることがあります。令和元年11月、鶴田ダム湖で大繁殖し、湖面を埋め尽くしました。



水草に大繁殖した鶴田ダム湖

これだけ湖面を覆いつくすと、水中に光が入らず、植物プランクトンが生きていけなくなります。そのため、湖内の生態系に大きな影響が出ます。また、冬場になって、一斉に枯死すると、分解されない植物体が腐り、水質の悪化も招きます。

水槽などで栽培され、身近に見かけることもある植物ですが、野外には拡げないよう注意が必要です。